

自然観察会報告
秩父中古生層の地層とカタツムリの観察会
横山謙二



カタツムリの説明を聞く参加者

7月7日（日）の浜松市旧引佐町で秩父中古生層の地層とカタツムリの観察を行いました。前日は少し雨が降りましたが、七夕の日であるこの日は、幸いにも青空の広がる良い天気でした。参加者は16名と、多くの方が参加してくれました。

今回の「地層」と「カタツムリ」という組み合わせの観察会は、不思議な組み合わせと考える方も多いと思います。しかし、この地域のカタツムリの多様性は、この地域に分布する秩父中古生層の地層と深いつながりと考えられます。それはカタツムリが殻を形成するのに炭酸カルシウムを必要とするため、炭酸カルシウムが豊富な石灰岩の分布地域には、多くの種類が集まり、個体数も他の地域より多く見られます。今回観察会を行った浜名湖北の旧引佐町地域には、秩父中古生層と呼ばれる地層が分布し、その中には石灰岩が多く含まれ、県内でも数少ない石灰岩の産地となっています。このことが、この地域でカタツムリの個体数・種類が多い理由だと思われる。

観察会は、三岳神社から立須まで、ところどころで見られる地層の観察やカタツムリを探しながら歩きました。歩き始めた三岳神社周辺には石灰岩が見られ、このあたりでは、オオケマイマイ、ヤマタニシ、キセルガイモドキなどのカタツムリが観察できました。

三岳神社から少し離れると、石灰岩があまり



立須カルスト地形で記念撮影

見られなくなり、かわりに泥岩層が見られるようになり、カタツムリはあまり見られなくなります。実は、秩父中古生層は、泥岩や砂岩、チャートの岩石からなる地層が主体で、石灰岩はこの地層中の極限られた場所にレンズ状に含まれるだけなのです。これらの地層は、石灰岩から古生代ペルム紀のフズリナの化石が発見されたことから、古生代の地層という意味と、この地層の模式的な地層が分布する埼玉県秩父の地名から“秩父古生層”と呼ばれていました。しかし、その後の研究でチャートからは中生代の三畳紀のコノドント、泥岩からはジュラ紀の放散虫の化石が発見され、この地層が異なる時代の岩体が集合したものとわかり“秩父中古生層”と呼ばれるようになりました。

立須に近づくと、赤色のチャートの地層が見られ、そのすぐ近くには輝緑岩や、再び石灰岩が見られるようになりました。この周辺の枯れ枝の中には、オオギセルがたくさんいました。中には、ミカフマイマイも見られました。

立須地域は、石灰岩が雨水で部分的に溶かされてできたカルスト地形となっています。このカルスト地形になっているところを登った頂上は見晴らしが良く、この日は晴れていたため、南側にきれいに浜名湖が望めました。

今回の観察会では、前日雨が降ったことが幸いしてか、10種類以上ものカタツムリを見ることができました。